



受難の主日 (マタイ 27:11-54)

「奪われた姿」が栄光と輝きに満ちている

2020年の受難の主日は、すべてを奪われて行う典礼となりました。「すべてを奪われた」と言えば、残念な気持ちになりますが、イエスの受難を黙想することで、「すべてを奪われた姿」が輝きを放ち、栄光の先取りと確信できるようにしましょう。

イエス様の姿をまず眺めてみましょう。イエスが十字架にかけられると、兵士たちはイエスの服を「くじを引いてその服を分け合い」(27・35)しました。兵士たちはイエスの服を奪ったのですが、イエスは「奪われた」とは言わないでしょう。無理矢理取り上げられたとしても、「与えてくださった」ものなのです。

イエスは「再び大声で叫び」(27・50)息を引き取られました。人々の罪と、不正な裁判で、イエスの命は奪われたのです。けれどもイエスはご自分の命を「奪われた」とユダヤ人たちを非難するのでしょうか。そうではありません。イエスは「命を与えてくださった」のです。

ここから、客観的には「奪われた」と見えることでも、「奪われた姿」が輝きを放ち、栄光の先取りとなることは可能だと分かります。今年、私たちは修道院で受難の主日を迎えました。シスターたちは客観的には多くを奪われた方々かも知れない。たとえば、季節に合った服、好みの服を着ないで、修道服を着ています。一般の人々から見れば、いろんな服を着るチャンスを奪われていると見えるかも知れません。

ではシスターたちは、季節の服、好みの服を着るチャンスを奪われていると不平不満を持っているのでしょうか。そうではありません。シスター方は、自分で決心して、いろんな服を着る自由を、神におささげしたのです。自由に着ることを、自分から神におささげしている姿が、輝きを放ち、栄光の先取りになっています。

司祭と、奉献生活者は独身を守っています。結婚して、家族ができ、家族とともに暮らすこともすばらしい人生です。きっと一般の人々から見れば、「結婚するチャンスを奪われている。取り上げられている」と見るでしょう。けれども本当にそう思っているのでしょうか。

そうではありません。司祭も、奉献生活者も、準備の段階でよく考えて、「結婚し、家庭を持つ生き方」を神におささげしているのです。結婚することもできた。家族を持つこともできた。この生き方をよく考えて神におささげしている。独身生活もまた、神と人々の前で輝きを放ち、栄光の先取りとなっているのです。

イエスは人々から服を奪われ、命を奪われ、もっと活動できたはずの未来の時間も奪われました。イエスの「奪われた姿」は、悲惨な姿なののでしょうか？決してそうではありません。イエスにとって、自分から与えてくださったものなので輝きを放ち、復活という栄光の先取りになっているのです。